

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands

島 嶼 研 だ よ り

No.62

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2011 年 9 月

主な記事

鹿児島大学大学院全学横断的教育プログラム「島嶼学教育コース」	p1
国際シンポジウム「太平洋島嶼地域における韓国多島海と日本南西弧島」	p3
「Small Islands -Ecology, Taxonomy and Ethnobiology-」	p3
島嶼研公開講座「海底から見た鹿児島・琉球弧」	p5
ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査	p8
フィールドこぼれ話「道に迷うー赤道真近の無人島迷路ー」（長嶋俊介）	p11
連載 とうがらしに旅して「こしょう？なんばん？」（山本宗立）	p12

鹿児島大学大学院全学横断的教育プログラム 「島嶼学教育コース」

国際島嶼教育研究センター長 野田伸一

鹿児島大学では第 2 期（平成 22～27 年度）の中期目標に大学の特色を活かした研究活動として「独創的・先端的な研究を積極的に推進するとともに、総合大学の特色を活かし、島嶼、環境、食と健康等の全人類の課題の解決に果敢に挑戦する」を目標の一つとして掲げ、「島嶼、環境、食と健康等の全学横断的な教育コースを創設するなど、大学院教育体制を整備・充実」し、人材の育成に努力することになっています。

全学横断的教育コースでは、近年の学問の学祭化・融合化により幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材が求められるようになったことから、大学院を横断して体系的に履修することにより、総合的な理解力や専門分野で得た知識を活かす能力を養うことを目標としています。この全学横断的教育コースは平成 22 年度後期に“島嶼学教育コース”、平成 23 年

度前期に“環境学教育コース”、そして同後期に“食と健康教育コース”が開始されました。

国際島嶼教育研究センターが“島嶼学教育コース”の取り纏めをすることになり、多くの方の協力を得てカリキュラムを編成し、当センターの教員が新設のコア科目「島嶼学概論Ⅰ（総合島嶼学）」と「島嶼学概論Ⅱ（自然環境学）」を担当することになりました。島嶼学概論Ⅰ・Ⅱは島嶼学教育コース修了のための必須科目となっています。島嶼学概論Ⅰでは「日本から太平洋の島々における人々の生活・社会の特徴・島嶼域の振興策」、島嶼学概論Ⅱでは「日本から太平洋の島々における人々を取り巻く環境や資源」について講義を行っています。また、講義の一部をそれぞれ三島村・十島村で実施しています。島に行かずして、島を理解することはできないとの考えからです。

(2) 島嶼研だより No. 62

国際島嶼教育研究センターが実際に島に出かけて講義を行う試みは、平成 17 年から開講している共通教育科目「島のしくみ」があります。本科目は、集中講義として与論島で開講し、与論島の経験豊かな実務者による講義を中心とし、与論島の現況や取り組みについて理解するとともに地域社会の在り方や活性化について考えるものです。この経験から、島嶼学概論Ⅰ・Ⅱでも島での講義を組み入れました。



硫黄島での記念撮影

平成 23 年 7 月 9～10 日に三島村の硫黄島で講義（島嶼学概論Ⅰ・受講生 8 名）、平成 23 年 1 月 21～23 日に十島村の中之島（島嶼学概論Ⅱ・受講生 5 名）で講義を行いました。三島村・十島村の関係者のご協力により、フェリー乗船時から鹿児島に戻るまで、自然・歴史・産業・交通など多彩な内容のプログラムを実施することができました。関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。



畜産施設見（硫黄島）



ジャンベスクールでの体験（硫黄島）



プランクトン採集（学生の研究）（中之島）



永田和彦先生、平泉二太先生、古橋典保先生、授業風景（中之島）



国際シンポジウム「太平洋島嶼地域における韓国多島海と日本南西弧島」

平成 23 年 4 月 19 日に鹿児島大学大学院人文社会科学研究科・国際島嶼教育研究センターの共催により、国際シンポジウム『太平洋島嶼地域における韓国多島海と日本南西弧島』が鹿児島大学において開催されました。まず、野田センター長が島嶼研の紹介、次に萩野副学長が鹿児島大学が取り組んでいる島嶼地域における

高等教育について紹介し、それを受けて木浦大学校島嶼文化研究院の姜鳳龍院長が島嶼文化研究院について紹介されました。その後、島嶼研 3 名・島嶼文化研究院 8 名・人文社会科学研究科 3 名による研究発表がなされました。一般市民、教職員、学生などの皆様に多数御参加いただき、盛会となりました。



国際シンポジウムに関する事前打ち合わせ



当日の様子

国際シンポジウム「Small Islands -Ecology, Taxonomy and Ethnobiology-」

平成 23 年 6 月 23 日に鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・京都大学東南アジア研究所・The Indonesian Institute of Sciences (LIPI) の共催により、国際シンポジウム『Small Islands -Ecology, Taxonomy and Ethnobiology-』がインドネシア・ボゴールにて開催されました。当日は

約 130 人が参加いたしました。島嶼研 3 名・LIPI 8 名の総勢 11 人よって、オセアニアおよびインドネシアの大小様々な島における研究発表がなされました。インドネシアは生物多様性のホットスポットの一つということもあり、生物多様性に関する議論が活発になされました。



会場の様子



午後のディスカッションの様子

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 112 回 2011 年 3 月 7 日

アダンはどこから来たか？

～パンダナス研究最前線～

宮本 旬子

(鹿児島大学大学院理工学研究科)

タコノキ科 Pandanaceae は、アフリカ、アジア、オセアニアの熱帯から亜熱帯に生育する単子葉植物である。*Pandanus* (タコノキ) 属 600—700 種、*Freycinetia* (ツルアダン属) 約 200 種、*Sararanga* 属 2 種、*Martellidendron* 属 7 種が含まれる。日本には、アダン *P. odoratissimus* L. fil または *P. tectorius* Sol. var. *liukuensis* Warb.、タコノキ *P. boninensis* Warb.、ツルアダン *F. formosana* Hemsley、ヒメツルアダン *F. williamsii* Merrill の 4 種が自生する。2009 年に北大東島産ホソミアダン *P. daitoensis* Susanti et J.Miyam. が記載された。今回は主に日本産のタコノキ属とその近縁分類群をめぐる話題を紹介する。

第 113 回 2011 年 4 月 18 日

島嶼活性化のために海洋微生物学は

何をなし得るか

前田 広人

(鹿児島大学水産学部)

演者は昨年 10 月に鹿児島大学水産学部に帰任した。前任地の三重大学生物資源学部における 6 年間の研究活動の中から、島嶼活性化のためのいくつかのヒントを紹介したい。第一は尾鷲市における海洋深層水の利用促進活動の紹介である。尾鷲市は三重県の南部に位置し、ある意味では離島に似た環境で発展してきた地方都市である。主要産業の水産を中心に大学と市役所の連携活動の軌跡を披露したい。第二は伊賀市に産官学連携センターを創設した話題

である。伊賀市は三重県と滋賀県、京都府および奈良県との境に位置した地方都市である。忍者の里として知られるように古来から排他的な性格の地域といわれている。このような地域の活性化のために三重大学がいかにして産官学連携センターを構築してきたのかを紹介し、ここでの活動事例として、バイオマスタウン構想の進捗状況を報告する。最後に、海洋微生物学からできる地域貢献策を提案したい。

第 114 回 2011 年 5 月 23 日

太平洋島嶼の自治化プロセスにおける課題の一側面 — クック諸島、ニウエとニュージーランドによる対島嶼外交の再検討 およびラパヌイ独立推進派の動向とチリ政府の対応 —

玉井 昇

(大分県立芸術文化短期大学国際文化学科)

概して、太平洋島嶼は欧米の植民地支配を受けてきたという点で共通の歴史を持つが、現在では、独立した国家もある一方で、他方では大国との自由連合やコモンウェルス、海外領土や属領など、非独立の島々も多数ある。これら非独立の政治的単位の中には、自ら意思で現在の地位を選択した地域もあるが、いずれにしても自治・自立化を進めている場合が多く、そのプロセスにおいて様々な課題に直面している。

そんな課題の一端を検討するために、ここではポリネシアのラパヌイ (イースター島) とニウエおよびクック諸島の事例を取り上げる。近年ラパヌイでは自治化を要求する声が高まっており、チリ政府の対応も厳しいものになっている。他方、ニウエとクック諸島について、2010 年 12 月にニュージーランド政府系の委員会によって発表された同国の対太平洋諸島支援策の再検討に関する報告書は、両地域の自治

化促進の失敗について言及がなされている。ラパヌイのようにチリからの脱依存度を高めようとする事例と、逆にクックやニウエのように依存度を高めている事例を同時に検討することで、太平洋島嶼における自治化プロセスの課題の一端を整理する。

第 115 回 2011 年 6 月 20 日

Poverty Issues in Pacific Islands

NARSEY Wadan

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

The Pacific Island Countries (PICs) are in an unusual situation in the context of poverty analysis in the developing world. They cannot be classified amongst the poorest less developed countries (LDCs), neither can they be classified as the More Developed Countries (MDCs). As such, internationally used criteria such as the Basic Needs Poverty Line of US\$2 PPP per adult per day for poverty analysis, is not suitable for the PICs. Neither are the standards used in MDCs which are far too high for meaningful use.

This presentation will explain the current methods used by some multilateral organisations (such as ADB and World Bank) to analyse the incidence of poverty in select PICs (Fiji, Solomon

Islands, Vanuatu and Tuvalu), some of the drawbacks, and the author's own approaches.

Indicative estimates are given, while indirect approaches are also explained. The need for the poverty analysis to be useful for indicators for specific poverty alleviation policies will be emphasized and the results.

第 116 回 2011 年 7 月 4 日

奄美の在来カンキツ—その来歴と特徴—

山本雅史

(鹿児島大学農学部)

奄美諸島有人島全 8 島における在来カンキツの分布を調査した結果、種の分布には一定の共通性があるものの、独自性も存在することが明らかとなった。これらの類縁関係および来歴を解明するためにアイソザイムおよび DNA 分析を実施したところ、奄美諸島在来カンキツの発生には原生種であるシクワサーとベトナム原産であるクネンボが重要な役割を果たしていることが明らかとなった。また、これらカンキツ類は機能性（健康維持・増進効果）成分の供給源としても有望で、特にケラジミカンおよび喜界ミカン（カーブチー）の果実中ポリメトキシフラボノイドは、他のカンキツよりも多かった。

島嶼研公開講座「海底から見た鹿児島・琉球弧」

平成 23 年 2 月 19 日（土）島嶼研公開講座「海底から見た鹿児島・琉球弧」が開催されました。

海底が近年注目を集めています。海底とその近辺の鉱物・エネルギー・生物等の諸資源の開発と利用、海底地形と陸上の生態系の関連性とその連続性・断続性、排他的経済水域の設定根拠や国防・国益的な問題等があります。それら

に関連する海洋基本法の展開や低潮渚線（海水位が低い時に出る海岸線）の保全などの問題は、国境政策並びに離島振興の方向性にも新しい視座を加えつつあります。最前線の研究成果又は方法論、そしてその動向をわかりやすく解説することが本公開講座の目的でした。以下に発表要旨を記します。

1：海底地形図を描く技術

田口一夫
(鹿児島大学名誉教授)

海図は、ある海域ごとの測点の水深をプロットしているが、測定は音響測深機と（今日では主として）電磁波精密測位によっている。しかし海洋作業を行うには、陸上の鳥瞰図のような海底地形のイメージ表現の方が、仕事の判断には好ましいから、海底地形を等深線で表現した海底地形図が刊行されている。この場合、測点間隔が広いと、描画者の主観によって描く等深線には誤差が生じる危険があった。1980年代以降ではマルチビーム測深機が導入されたので、この懸念はほとんど解消した。

一方、位置測定の精度は進歩した電子航法技術と、機器の小型化などにより、天候による妨害を減少させた。したがって測深作業の稼働率が向上すると共に、海図の精度が向上したことを特記したい。

ここでは測深・測位の基本についての理解を得るために、両者の原理に限定して解説する。しかし超音波測深機の技術的制約のため、測深精度の向上には限界があるので、デジタル測定値の十分な吟味の必要ことを力説した。また測位手段としてはGPS測位のみを述べるが、その誤差改善のための補助システムも要約した。なお国際的な衛星測位システムの運用に、わが国が全く関与していないことを留意すべきである。

2：宇宙と海底から見た南の島々

木下紀正
(鹿児島大学名誉教授)

鹿児島湾を出て種子島・屋久島を左手に見ながら南下すると、この1万年で日本最大の海中大噴火を起こした俊寛伝説の島があります。さらに秘湯に恵まれた活火山の島々が続き、中には桜島を抜く噴火活動も見られ、無人島になった所もあります。やがて鮮やかなサンゴ礁に縁

取られた島々が現れ、奄美・沖縄、更に先島諸島へと連なっています。これらの島々を、宇宙から見た選りすぐりの画像データと地上・海底地形図を用いた3Dパノラマによってご案内します。

3：琉球弧の海岸段丘と海面変化、隆起

森脇 広
(鹿児島大学法文学部)

海岸段丘は、海岸地域において段丘崖によって区切られた階段状に広がる平坦な地形である。琉球弧（南西諸島）の島々は海岸段丘が広く分布していることから、人々の生活と深く関わり、南西諸島を大きく特徴づける景観をなしている。この講座では、海岸段丘からどのような海岸環境変化を読むことができるかを解説する。

海岸段丘の平坦面は、海的作用によって侵食されてできた波食棚・海食台や堆積してできた三角州、サンゴ礁などの平坦な地形からなる。奄美大島より南では隆起サンゴ礁によって作られている。これより北の屋久島・種子島は主に侵食によってできた平坦面からなる、したがって、段丘面は過去の海面の位置を記録している。南西諸島の島々には海岸段丘が何段もあり、階段状に過去の海面が離水してきたことがわかる。日本の標式的な海岸段丘分布地域のひとつとされる種子島は10段ほどの海岸段丘面が認められている。それらは大きく低位と中位、高位の3群に分けられている。このような段丘面はどのような環境下で形成され、この知見からどのようなことがわかるのであろうか。

過去において海面は、最大100m以上の規模で上下に繰り返して変化した。海岸段丘面はこうした上下の海面変化のうち、上昇がピークに達した高海面期に作られたことがわかっている。したがって、何段もの段丘面は過去の何回かの高海面期の海面位置を示していることになるので、ある高さにある段丘面は、その位置から海面が低下したか、過去にこの高さより

下の方にあった海面で作られた平坦面が隆起したかによって作られたことになる。海面変化の研究によると、何回もの高海面期の海面は現在とほぼ同じかこれよりも低い位置にあったことがわかっている。よって、海岸段丘面は、高海面期に平坦化された面が隆起して作られたことになり、海岸段丘の存在はその地域が隆起地域であることを示す。

ある海岸段丘面の年代と現在の高さがわかると、その場所の隆起の規模がわかることになる。また、数段の段丘面についてこれがわかると、隆起の歴史がわかる。これまでの海岸段丘面の研究では、等しい速さで隆起したことがわかっている。さらに、こうした段丘面が広く追跡されると、地殻変動の地域性がわかることになる。海面変化は世界にほぼ共通して生じているから、この変動の様子は汎世界的に追跡できることになる。もっともよく追跡されている海岸段丘面は、12万5000年前に作られた平坦面である。なぜか。講座で解説する。喜界島はこの面が海拔200mにあり、日本ではもっとも隆起の大きい地域として知られている。

4：琉球弧の生物多様性

岡野隆宏

(鹿児島大学教育センター)

琉球弧の島々には、奄美大島・徳之島のアマミノクロウサギ、沖縄北部のヤンバルクイナ、西表島のイリオモテヤマネコなど代表されるように、一連の島のつながりでありながら、島ごとに異なる生物、しかも世界中でその島にしかいない生物がたくさん見られます。これは、地殻変動や気候変動による海水面の上下により、ユーラシア大陸との分離・結合が繰り返され、島に隔離された陸生の生物が、独自に進化し、あるいは他の島では絶滅するなどによって、島ごとに異なる生態系が形成されたからだと考えられています。

このような点が評価され、2003年に学識経験者からなる「世界自然遺産候補地に関する検討

会」(環境省と林野庁が共同で設置)において、トカラ列島以南の南西諸島(検討会においては「琉球諸島」の表記を使用)が、知床(2005年登録)、小笠原諸島(2010年推薦)と並んで世界自然遺産の候補地に選定されました。

今回は、琉球弧の多様な生物を紹介するとともに、最近の研究成果からその生物が辿ってきた歴史を振り返ってみたいと思います。

5：特別講演

「海洋新法と海底をめぐる権利・資源・紛争」

山田吉彦

(東海大学海洋学部海洋文明学科)

特別講演では山田氏の海洋基本法関連諸法の立法や海事諸案件等に関わる豊富な関与や現場体験を元にした貴重な報告をいただいた。その報告は当該地域を核にしながら日本国の全海域におよんだ。それぞれの海域・国境案件などに関わる問題の背景と見通しや解決方法についての見解も資料提示の上、表明をいただいた。とりわけ尖閣諸島・沖の鳥島・北方領土の現場写真は貴重であった。排他的経済水域内の海水体積も海中ウラン抽出技術等で新しい指標として示された。日本は屈指の海水大国でもあるという。また海洋基本法以降の流れと、そこでの離島の位置づけの推移の解説も頂いた。意義ある知識の開示となったのみならず、参加者に大きな関心と感銘を与えることができた。(文責長嶋俊介)



特別講演をおこなった山田吉彦氏

お知らせ

(1) 研究調査

国際島嶼教育研究センターでは「島はひとつの世界」という概念のもと、「多島域における環境変動に対する適応」および「小島嶼の自律性」の2つのプロジェクトを軸に、国内外の島嶼部で研究調査をおこなっています。

プロジェクト1：ミクロネシア地域における自然・社会環境と人々の生活に関する調査

目的：ミクロネシア地域ではグローバリゼーションや気候変動の影響を受け、伝統的な社会の崩壊とともに自然・社会環境が悪化している。本地域の島嶼国は環海性・隔絶性・狭小性・分散性という地理的環境としての困難性を抱え、脆弱な経済からの脱却は容易なことではない。しかし、人々は先進諸国の政策に翻弄されながらも、誇りを持って生きてきており、その生活の多様性は尊重されるべきである。本研究の目的は、ミクロネシア地域における自然・社会環境の変化がどのように個人の生活に影響しているのかを明らかにするとともに、この地域の生活改善策の提言を行う。

調査地：ミクロネシア連邦チューク州（ウェノ島、ピス島、ロマヌム島）

調査期間：平成23年7月25日～8月29日

メンバー・調査内容：

野田伸一（国際島嶼教育研究センター）

チューク州における蚊の分布

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

公衆衛生的な改善努力

八田明夫（教育学部）

チューク州チューク環礁に産する有孔虫群集の解析とその教育への活用

川西基博（教育学部）

ミクロネシアにおける砂浜植生の種多様性と生態的特性に関する研究

西村 知（法文学部）

チューク州における村落調査

中谷純江（国際戦略本部）

ウェノ島における資源と人の関係性

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）

チューク州チューク環礁における貝殻多様性に与える環境要因に関する研究

山本宗立（国際島嶼教育研究センター）

チューク州におけるトウガラシ属の民族植物学的調査



ウェノ島からピス島へ向かう調査参加者



ピス島



蚊の採集 (ピス島)



世帯調査 (ロマヌム島)



トウガラシ属の調査 (ウェノ島)



海浜植物の調査 (ロマヌム島)



島民との記念写真 (ピス島)



島民との記念写真 (ロマヌム島)

(10) 島嶼研だより No. 62

プロジェクト2：水産学部練習船「南星丸」を利用して、竹島学術調査

調査地：鹿児島県三島村竹島

調査期間：平成23年5月9日～11日

メンバー：

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

田島康弘（地理研究所）

八田明夫（教育学部）

梁川英俊（法文学部）

寺田竜太（水産学部）

河合 溪（国際島嶼教育研究センター）



調査参加者の集合写真

(2) 着任

外国人客員教授として南太平洋大学から Wadan Lal NARSEY 氏が着任しました。招聘期間は平成23年5月10日～平成23年11月24日です。研究テーマは「Quantitative poverty analysis for Fiji, Tuvalu, Solomon and Vanuatu」で、専門は経済学です。

最近の出版物

国際島嶼教育研究センターの出版物

(1) 南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.32, No1, 2011

Research Papers

CAMPBELL I.: Tongan Political Reform: The Odd-One-Out in Pacific Politics

HOSSAIN Md. S., HOSSAIN Md. A., MAMUN Md. A., ALI Md. Z., BULBUL M., KOSHIO S. and KADER Md. A.:

Evaluation of Rice Bran and Wheat Bran as Supplemental Feed Compared to a Commercial Feed for Monoculture of GIFT Strain of Tilapia (*Oreochromis niloticus*) in Bangladesh

KOBARI T., HIJYAMA K., MINOWA M. and KITAMURA M.: Depth Distribution, Biomass and Taxonomic Composition of Subtropical Microbial Community in Southwestern Japan

Notes

INOUE Y.: A Pilot Analysis of the Role of Learning Styles in Online Learning Environments: The Case of an American Pacific Island University

(2) 南太平洋海域調査研究報告 No.51「亜熱帯の小さな島々に関する学際的研究」（桑原季雄・河合溪編）（2011年3月）

(3) 南太平洋海域調査研究報告 No.52「豊かな島嶼の発展のために」（富永茂人・長嶋俊介編）（2011年3月）

～フィールドこぼれ話～

「道に迷うー赤道真近の無人島迷路ー」

長嶋俊介（国際島嶼教育研究センター）

「道に迷う」ことは、人生・生活の諸場面で常にある問題だが、絶海の環礁の無人島で迷子状態になったことがある。4年前ミクロネシア連邦ポンペイ州モキール環礁での出来事である。北の Urek（タロ畑を意味する）島と西南の Muuandohn（ココナツを意味する）島と、東南の Kahlap（home island）本島からなる環礁である。本島には自然の地形にできたタロ畑があり、ココナツ島にも小さなタロ畑がある。この島には本島から、瀬戸内海の農耕船のようなではないが、耕作には来ている。興味がわき、つつい道草したくなる。地元のメイヤー（村長）と他の団員の速足にはつい遅れがちになる。通勤自転車をしていたので足が遅いわけではない。慣れないビーチ草履で足が痛んでいたりして遅い、かつ「わき見心」にそそられる。けもの道的細さで曲がりくねり、木と雑草が視界を遮る。あの方向に進んだはずと急ぎ出すと全くどんどん離れ、脇道にそれたかと思われてくる。こんな時「近道」探しを始めてはいけない。とにかく記憶のあるところに戻る。逆行の勇気である。そこで声を出しつつ待つ。孤立感・不安感が増したころ、やがて村長と団員1名が迎えに来てくれた。

もしこの時団員のみでできたら二重遭難になりかねない。縁起の悪い表現だがミイラ取りがミイラになっていたであろう。頭の中に地図のある人（地元の達人）とくる鉄則でみごとであった。最近ではコンパスより有力な GPS（Global Positioning System: 全地球測位システム）の携帯。あるいは洞くつ探検のような、ひもやテープで来た道記録を残しつつ進む・・・。全く一人で何も持たず迷い込んだらどういう方法があるだろう。

どの方向か考えて、ビーチに出る。そこで待ち続ける。見つけてもらう戦略。これは一見簡単そうだが、直線的にビーチに出られないほどブッシュは深い。珊瑚石でデコボコごっこつして、直線的道もない。太陽の方向で方角が分かる程太陽の位置も低くない。夕方まで待ったら早く始まる深夜に取り残される。日本の山道のような踏みわけ道や稜線、あるいは木にくくりつけたテープがあるわけでもない。北のサバイバル技術が通用しない、南の島、低緯度の島の無人島マジックであった。



「モキール環礁（手前が Muuandohn 島:無人島（右奥が本島:有人島））」

「とうがらしに旅する」

第三回 「こしょう？なんばん？」

江戸時代・近代から唐辛子の標準的な名称として「とうがらし」が使われてきた。でも地域によっては唐辛子のことを違う名前と呼んでいる。九州で「こしょ（う）を取って」と言えば、だいたいの地域で唐辛子が出てくるだろう。地場産の野菜直売所では唐辛子に「こしょう」とラベルが貼られているし、ホームセンターでは唐辛子の苗が「こしょう」として売られている。九州では唐辛子も胡椒も「こしょう」なのだ。ややこしい。さて今度は東北へ行ってみよう。東北では唐辛子のことを「なんば（ん）」と呼ぶ。関西では「なんば（ん）」といえどトウモロコシのことを指すので、これまたややこしい。関西人が東北の食堂で「なんば（ん）」を頼むと唐辛子が出てきてびっくり！という笑い話を創作して、どこかへ投稿するものまた一興。唐辛子の名称としての「なんば（ん）」と「こしょ（う）」の分布をみると、新潟県、長野県、岐阜県のあたりを境界として思いのほかくっきりと東西にわかれる。「とうがらし」は太平洋ベルト地帯が中核地域のような。先日長野県木曽郡の道の駅「日義木曽駒高原」へ行く機会を得た。すると新鮮な果実は「なんばん」として売られ、そばの棚には「青こしょう醤油」（青唐辛子を醤油に漬込んだ商品）と「青とう味噌」が陳列されていた。まさに文化の接点である。このような方言は、既に200～300年前の文献に散見される。情報が氾濫する現代において、拡大の一途をたどる「とうがらし系」勢力に負けず、「なんば（ん）」、「こしょ（う）」などの方言が今でも使われているのは、なんだかうれしい。（山本宗立）

編集後記

今年はミクロネシア連邦チューク州において調査をおこないました。ウェノ島では頻繁に停電が発生し、ピス島・ロマヌム島には基本的に電気がありませんでした。が、日が沈むと星の多いこと美しいこと。波の音を聞きながら、たわいのない話や狼談で盛り上がる。コンクリートの床にマットを敷いて早々に寝る。鶏のけたたましい鳴き声とともに起きる。そしてココヤシの下に座り、水平線から昇る朝日をぼーっと眺める。人間本来の生き様をチュークで再確認したような気がいたしました。（山本宗立）



Kan（蒸したパンノキの果実を搗いた食品）を作る風景。滑らかでとてもおいしい（ピス島）

島嶼研だより No. 62 平成23年9月30日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>